

☆ 授業のヒント

今回は、スキットを使った会話の練習を紹介
 します。

テーマ スキットを使った会話練習

目的
<ul style="list-style-type: none"> ・学習する文型の使い方を知る ・実際のコミュニケーションの練習をする
学習者のタイプ
・初級から中級、上級
クラスの人数
・何人でも
準備するもの
・テープ、絵教材、OHPなど

スキットとは

スキットは、学習する文型を用いたモデル会話のことです。寸劇という言葉を用いることもあります。

スキットは、場面シラバスや機能シラバスの教科書では必ず最初にできますが、文型シラバスの教科書でも多くの教科書に使われています。文型の意味を学習して、形を作って言えるようになって、なかなか実際に使えるようにはなりません。文型を使えるようになるためには、それを使用する場面や状況についての情報を理解することが欠かせません。スキットはその場面や状況の例を示してくれるのです。

スキットを会話練習に使う場合、ロールプレイと違うのは、言葉を自由に選ぶ余地はあまり多くないということです。ロールプレイは、状況と役割を指示するロールカードを使いますが、そのカードには、会話の台詞は書いてありません。ですから、ロールプレイをするときには、学習者は自分で言葉を選び、会話を進めます。一方、スキット練習は劇の練習に似ています。つまり、スキットは劇の脚本や台本のようなもので、実演するとき学習者が言うことはあらかじめ決まっています。ロールプレイの前段階として会話のモデルを提示して、その会話のパターンを覚えるまで練習することがありますが、これは、スキット練習の一つです。

スキットの作り方

教科書にあるモデル会話をそのままスキットとして会

話練習に使ってもいいですが、そのまま使うと、次のような問題があります。

- 1) スキットが身近なものでないために学習者が興味を持たない。
- 2) 文型の例として会話で作られていて、自然な会話でない場合がある。

そこで、教科書のモデル会話を使う場合でも、できるだけ自然で現実的な会話に直したり、面白くて身近な場面を考える工夫が必要となります。

教師が自分で初めからスキットを考えたい場合は、学習した文型は、いつ、どこで、どんなふうにするのか、まただれとだれの会話なのかをしっかりと考えて作る必要があります。また、学習者にとってモデルとなりますから、使っている日本語が正確であるかどうかにも気をつけたいでしょう。参考文献にあげたスキット集や教科書、使用例の豊富な文型辞典、インターネットの日本語サイトなどはスキットを作る際の力強い味方になるでしょう。

スキット練習の方法

(1) 練習前のインプット

場面の設定がわかりやすいように、絵やポスターをはったり、レアリア（広告、パンフレットなどの実物教材）を用いたりするとよいでしょう。母語でもよいので、その場面について学習者に、そこでどのような会話が行われるか予想させたりすれば、学習者が場面をイメージしやすくなるでしょう。未習の語彙はこの段階で説明しておく必要があります。

(2) 導入

教師一人の時は、テープを使って会話を聞かせます。複数の教師が教えている場合は、二人で実演してみせてもいいでしょう。最初に会話を聞かせる前か後に、会話をしている場所はどこか、会話している人はどのような関係かなどを質問してもいいでしょう。そのあと、学習者は繰り返し聞いて、スキットのあとについて発音練習をします。

(3) 役割練習

はじめは、教師がAになり、学習者がBで役割練習をします。次は、学習者同士で役割練習をします。役割は途中で変えます。

次に、黒板やOHPにスキットを書いておき、スキットを少しずつ消したり隠したりして、少しずつ学習者がスキットを暗記して言えるようにしていきます。

学習者がスキットを覚えたら、みんなの前で実演させてみましょう。もし、学習者が台詞を忘れたときは、学習者が思い出せるよう絵や文型などヒントとなるものを用意しておくといいでしょう。また、学習者の文法や発音の誤りは実演のあとに直します。

スキット練習を発展させる

初級では

初級の学習者には、スキットの一部分を自分で作らせて実演させるのもいいでしょう。例えば、下に例としてあげてあるスキットでは、落とされたものや、落とされたものの特徴、行った場所などを、学習者が自由に選べるように設定できます。



学習項目：形容詞

場所：交番

A：すいません。(バッグ)を落としました。

B：どこですか。

A：わかりません。

B：今日はどこに行きましたか。

A：(花丸公園)と(デパート)です。

B：どんな(バッグ)ですか？

A：(黒くて小さな)(バッグ)です。

B：わかりました。この紙に名前と住所と電話番号を書いてください。あとで連絡します。

A：すいません。よろしくお願ひします。

このように、自分で考えられる自由な部分があると、学習者のスキット練習をする動機や練習後の達成感が高

まります。また、聞いている学習者には、スキットの内容について質問をすることにすれば、聞いている学習者の聞き取り練習にもなるでしょう。

中・上級では

中級や上級の学習者には、教師が文型と場面を与えて、短いスキットを作らせることもできます。さらに、場面や状況も学習者に考えさせ、より発展的な活動にすることもできるでしょう。その場合、まず、教師は使ってほしい文型を学習者に示します。次に、教師は必要に応じて、学習者に文型の例文などを参考にさせたり、例となりそうな場面を提示したりします。例えば、「～てもらいます」という文型でスキットを作る場合、「休みをとらせていただきたいんですが」というような丁寧に許可を求める表現が使える会社や学校の場面や、「料理を作っていたいてありがとうございます」などのような感謝を述べる場面などが考えられます。どんな場面にするか、どんな関係の人たちのどんな会話にするか具体的なスキットのあらすじは、グループで考えさせましょう。その際、教師は、学習者が自由に考えすぎて日本語では言わないような場面を設定していないか注意しながら話し合いを見守ります。また、学習者からスキットに必要な語彙や表現を求められた場合、教える必要もあります。想像力のある学習者は、身近な話題で、とてもおもしろいスキットを作ることでしょう。

学習者には会話を書いて提出させます。学習者が作った会話は、教師が確認し、日本語の誤りなどを訂正しますが、学習者が考えたアイデアはできるだけ生かし、直し過ぎないように注意しましょう。

このようにして学習者が作ったスキットについては必ず発表の機会を作りたいものです。クラスの中で実演してもいいですし、例えば、発表会のような機会を設けて、クラス外の人に見てもらおうようにしてもいいでしょう。そのときには、ぜひそのスキットの場面に合った服を着せたり、背景を作ったりして、楽しい雰囲気を出してみてください。

参考文献

1. 水谷信子『初級日本語スキット集』The Japan Times(1995)
2. 文化外国語専門学校編『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』凡人社(1994)
3. 砂川有里子他『日本語文型辞典』くろしお出版(1998)
4. 国際交流基金『教科書をつくらう』(2002)

担当者が替わりました。小玉安恵、古川嘉子

読者の皆さんからのアイデア、成功例、失敗談などぜひお寄せください。